
勇者らしくない勇者たち？

月食猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者らしくない勇者たち？

【Nコード】

N11060

【作者名】

月食猫

【あらすじ】

ズラに導かれて（？）月詠と日向の二人は魔王が蔓延る異世界へと召喚されてしまった！！そして月詠は『ユルユル勇者』、日向は『ヘッポコ勇者』の称号を手に入れた？

初投稿なので、色々とアドバイス下さい。

百年に一度、魔王の年と言うものがある。そして、その魔王の年の初めに現れた最初の魔王を勇者が倒さない限り、際限なく魔王は増え続ける。逆に、無事勇者が魔王を倒したのならば、後百年は安泰だという言い伝えがあった。

そして、魔王の年の一番最初に現れた魔王は、其の名に相応しく強大な力を持っていたがとても心優しい人物だったので、勇者は彼を殺さずについ放っておいてしまいました。その結果

世界に魔王が溢れてしまいました。

各地に魔王。領主の代わりに魔王。地主の代わりに魔王。貴族や王様になり変わる魔王。どこもかしこも魔王で溢れています。もはや台所でうごめくミスターG並みの多さです。

その為、勇者が一人では追いつかなくなり、各地で勇者を名乗る者も増え、勇者は力自慢達に人気の職業として認められるようになりました。

ですが、その内勇者とは名ばかりの荒くれ者が増え、世の中はどんどん混乱して行きました。

「このままじゃとイカン…。そうじゃ、異世界から真の勇者となりえる者を呼びだせばいいんじゃない！」

そう考えた、賢者の一人として知られている老人は、やたらめつたらと知っている魔法陣を重ねて

「そいやっさー！！！」

と老人にしては元気が有り余っていてなおかつ掛け声としてはいかなものかと言いたくなるような掛け声と共に魔法陣を発動させた。掛け声と共に吹き飛ぶ老人のカツラ。魔法陣が輝きだすとともに、

宙を舞っているカツラも輝きを増し、その姿？を消した。

同時刻、影宮月詠かげみやつくよとその親友である五十嵐日向いがらしひなたは都内でも有名なクリスマスツリーを見に来ていた。

「あれ…？なんであんな所にカツラが？」

月詠はそう言いながら、クリスマスツリーの一番上を指差した。
「あ…ホントだ」

月詠の言う通り、本来ならば星が燦然と輝いているはずの所にカツラが引っ掛かっていた。しかも、そのカツラそのものが光を放っているようだった。さらに、その光はだんだんと強くなっているようだった。

どうやら、その不自然なカツラの存在に気付いているのは月詠と日向だけのようだった。おかしい、明らかにおかしいと二人がいぶかしんでいると、カツラが一際強く輝き、その光に飲み込まれるかのように二人の姿が消えた。

そして、その輝きに気付いた者も、二人が居なくなったことに気付く者もいなかった。

俺達が目を開けると、そこはさっきまでいたクリスマスツリーの前ではなく、暗く見慣れない室内の真ん中辺りに書かれているらしい何やらめっちゃくちな魔法陣ツぽいものの上に立っていた。

せつかくこの後明弥の所にケーキとかをたか…ごちそうになろうと思ってたのに……。と思っていた俺は、とりあえず唯一事情を知っているような存在。今日の前でうつぶせに倒れているハゲから事情を聞こうと思う。

「オイ起きろハゲ親父」

そう言って容赦なく乱暴に揺すっている俺を日向が止めた。

「違うよハゲジジイだよ」

「そうだったな」

普通だつたらもう少し違う止め方をする俺の親友も混乱しているのか、ちよつとずれたツツコミをしてきた。

「ジーさん起きてー」

「返事がない、ただの屍のようだ」

俺はそう言いながら、ジイさんの頭をジイさんのロープで磨いてみた。すると俺のふざけた物言いに反応したのか、今までピクリとも動かなかったジイさんがまるでゾンビのように飛び起きた。

「誰が屍じゃ！ワシはまだピンピンしておるわっ！！」

「オイジジイ今すぐ100字以内で状況を説明しろ」

軽く目が据わっている俺達に驚いたのか、ジイさんはしばらく茫然とした後、急に嬉しそうに話し始めた。

「よしよし、どうやら成功した様じゃの。今のこの世界は魔王が溢れかえつてるような状態なんじゃ。かといって残念ながらこの世界の勇者たちでは相手にならん…。じゃからワシは異世界から勇者を召喚したんじゃ！お二人はこの世界の勇者となるべく選ばれたのじゃ！！」

「メンドイから断る」

速攻で断る俺。

「ちよつと月詠！話だけでも聞いてあげようよ」

「ヤダよ。なんで俺達が知らねえ世界の為にバトラなきやいけないんだよ」

つー訳でさつさと俺達を元の世界に戻せと言う俺に、ジイさんはニヤニヤしながら言った。

「この世界の魔王をほとんど倒さないと戻れないように設定したから無理じゃ」

そう言つて立てられたジイさんの親指を、俺は思わず折ってしまった。ジジイが悲鳴を上げているが気にするものか。

「どうしよう僕激弱だよ！？」

ジジイの話を聞いて焦る日向に、ジイさんは励ますように言った。「大丈夫じゃ、主らはこの世界に来た事でパワーアップしている…」

…ハズじゃ」

「何その超不安になるようなセリフ！最悪だなアンタ！！」
逆に不安を煽っただけだった。

「安心しろ日向。いざとなったら俺が護ってやる」
とりあえず、励ましの言葉を言ってみた。

「…勇ましいね月詠」

俺達が勇者になることを認めた様な反応をした事に、ジイさんは満足していた模様だったが、そうはいかない。

「…とりあえずくたばつとけやこんのクソジジイ！！」

「ぎゃああああああああああ！！！！」

ジイさんの所から略だ…貰った装備を身につけ、俺達は旅をする事にした。一応この世界の知識は頭に入れたし、今の状況もだいたい分かった。

魔王を倒すのは、マジな流血グロ系の殺しだけじゃなく、話し合いによる和解または降参させるのもいいらしい。

途中何度も魔物らしきモノや山賊的な方々に襲われたけど、それはすべて月詠が倒してくれた。マジで最強だ。これなら魔王も倒せるかもしれない。

でも、護られてるだけじゃいけないからと思って、月詠に鍛えてもらった。おかげで前よりは強くなった気がする。…でも、精神までは鍛えきれない感じはするよ。

「俺はなにも見ていない俺はなにも見ていない」

「俺もだ。あんな弱そうな魔王は見えていない」

今俺達の目の前にはお花畑があつて、その真ん中あたりに全身真っ黒でトゲトゲした衣装を纏ったカッコいい系の青年が、俺達を見

てプルプル震えながら

白旗振っていた。

しかも、風に乗って微かにだけど

「どうしよう勇者たちに会っちゃったよウワン!!」

という泣き声が聞こえてきた。マジで魔王が疑いたくなるよ。

「なんだあのオトメン（乙女な男の事）。あんなんでも魔王になれるんだったらもう末期だろ」

と月詠が言ってたけど、俺のその意見に賛成だよ。

その時、丁度魔王と俺達をはさむようにして魔物が出現。反射で倒しちゃったら、直後に魔王に抱きつかれた。

どうやらこの魔王は、俺達が護ってくれたと勘違いしたらしい。おかげでワンコのように目を輝かせて懐いてきた。

「僕は魔王のフランって言います!! 治癒術が得意なのでどうか一緒に連れてって下さい!!」

「あのさ、俺達魔王討伐の旅の最中だよ!? それでもいいの!？」

「ハイ! 丁度迷子になってた所ですし、もう僕の城には新しい魔王が住んでると思うんで、大丈夫だと思います!」

「じゃあ、元魔王って事になるのか」

「つつ月詠!？」

「あ、そうですね」

「じゃあ問題ない。俺の事は月詠と呼んでくれ」

「なにナチュラルに挨拶してるのさ!？」

「戦力は多い方が良いと思ったから」

「…あ、そうすか。俺の事は日向って読んでくれ」

「ハイ! 宜しく願います、ツクヨさん、ヒナタさん!」

こうして、異世界から来たユルユル勇者とヘッポコ勇者の二人組

に元魔王が加わり、このおかしい男三人での奇妙な旅が始まった。

「ところで、なんでお前みたいなのでも魔王になれたんだ？」

「あ、家業だったんで仕方なく。でも、僕魔力は大きいんで」

「へえ、魔王つて世襲制だったりするんだ」

「まあ、大体はそうらしいですね。下剋上とかもありますけど」

「こら月詠！フラン！何とんださ！早くしないと日が暮れちゃうよー！！」

「「はい」」

…時折この真面目な性格がどうしようもなく恨めしくなる時もあるんだけどね。

（後書き）

気が向いたら続きを書くかもしれません。最後まで読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1106o/>

勇者らしくない勇者たち？

2010年10月10日00時39分発行